初期シュライエルマッハーの〈教養〉概念

帆　苅　　猛

序

シュライエルマッハーが一七九九年に出版した『宗教論』は、周知のように、「宗教を軽蔑する者に伍する教養ある人々に対する講話」という副題が付されている。この副題に見られるように、彼の『宗教論』の論述は、直接的にはいわゆる当時の「教養人」に向けられている。

ドイツに「教養身分」といわれる階層が出現するのは十八世紀末頃のことである。これが十九世紀になって「教養市民層」と称される階層へと発展していく。[1] これらの階層は、従来の貴族と市民という出自による枠付けを越えて、「教養身分」として社会の上層を形成していく。ただ、シュライエルマッハーが『宗教論』を著した十八世紀末においては、教養人(Gelehrte)と言われる人々はまだ社会的に確定されておらず、あいまいで多義的であった。[2] しかしいずれにしても、教養および教養人が広く社会的な地位を表示するものとなり始めており、シュライエルマッハーばかりではなく、多くの同時代人が「教養」および「教養人」について語りはじめていた。

野田宣雄によると、〈教養〉すなわち《Bildung》は元々、像・模像、そして、造形・形の意味を持っていたが、これが中世後期以来の神秘主義、敬虔主義を介して「人間の成長」に結びつけられていく。[3] そして、このBildungの概念は教育Erziehungと重なりながらも、後者が教育の実践的行動を含意するのに対して、前者は自己形成・個人の内側からの発展という意味を持つようになり、徐々に区別されてくる。その後、この教養概念は啓蒙思想の影響を受け、より個性・発展を重要な意味として掲げ、これが古典主義、ロマン主義、ドイツ観念論、新人文主義といった当時のドイツのさまざまな思潮に乗ってドイツ中に広がることになる。

教養人を性格づける〈教養〉すなわち《Bildung》はその動詞であるbilden（「形づくる」、「形成する」）の含意を強く持っている。すなわち、個々人が完成状態へと向かう自己形成の途上であり、その営みを継続している過程こそが強調されていた。教養を有していると目される人々は、自己完成への努力を続けている人間であり、個性を統合された全体性へと作り上げることを目ざす人間である。[4]

こうして、この時期の教養概念は知識というよりもむしろ、人格形成と道徳教育を結びつけた概念であり、啓蒙思想に特徴的だった教育・進歩の意味とは徐々に距離を置き、人間がよりよくなる精神的、道徳的過程として主張されるようになった、と宮本は言う。

野田の言うように、教養市民層の核となる教養概念は「現世内的自己完成をめざすすぐれて審美的な人生観」であった。それゆえ、罪と恩寵との関係を基軸にすえるような救済宗教の立場とは相容れず、したがって、恩寵を伝達する手段としての教会も不可欠ではなかった。教養理念はその根底に人間性についての楽観的な見解を有しており、そこでは、救済宗教や教会宗教は不必要であった。こうした見解はカントやゲーテなどにも代表的な形で見ることがで

きる。[5]

したがって、当時の教養人たちは伝統的宗教やキリスト教会に対して批判的であり、それらに対しては低い評価しか与えていない。宗教が必要とされるにせよ、宗教にはせいぜい社会秩序の維持ないしは道徳の補完的な役割しか与えられていなかった。宗教が必要とされるとすれば、それはとくに下層の民衆の教化のためであった。

これに対してシュライエルマッハーは「教養」を宗教、とくに、キリスト教と密接に関連づけて考察する。シュライエルマッハーにとっても、「教養」は単なる知識内容ではなく、人間形成、人格形成という意味合いが中心に用いられている。この教養・形成概念は、シュライエルマッハーの〈宗教〉概念とも密接に関係している。彼によれば、教養すなわち人間形成と宗教は相互に分かちがたく結ばれており、宗教概念は教養すなわち人間形成にとって欠くことができないものであった。シュライエルマッハーの意図は、当時の、宗教と教養が乖離している状況にあって、両者を密接に関係するものとして提示することにあった。[6]

本論文ではまず、シュライエルマッハーの初期の教養概念を、とくに、『宗教論』と『独白録』を中心に検討したい。

一　シュライエルマッハーの見る「教養人」

シュライエルマッハーによると、当時のいわゆる教養人たちは「凡俗なものの上に抜きん出た当代の英知に満たされた人々」であり、趣味の良い住まいに住み、家の中には賢人の金言や詩人の詩句を家神のようにまつっている。彼らの心は、人類と祖国、芸術と学問といったもので完全に占められているので、この世の彼岸にある永遠にして神聖

な存在は、身の置き所もなくなっている。彼らは、現世の生活をたいそう豊かな、多面的なものとすることに成功したため、永遠なものなど不要になったのだ、と言う。[7] こうして、彼らはこの世の彼岸にある永遠かつ神聖な存在には目を向けず聖職者のことばを聞くことを好まない。彼らは現世の生活に満足し、みずからの宇宙を創造したので、みずからを創造した存在のことを考えない。

シュライエルマッハーはまず、近代社会の現世主義を問題とする。すなわち、この世を超越したもの、あるいは、宗教的な要素を否定して、国家、社会を中心として人々の意識を制限し、人間を社会生活の枠の中に閉じこめようとする傾向である。これは、彼に言わせると、「役に立たないスコラ的なことばの学をすてて、急ぎ足で赴いた実利主義の極致」であり、「粗野な専制政治にとってかわった父祖伝来の幸福主義的政治のみごとな結実」である。[8]

そもそも、宗教を妨げるもの、それは懐疑家や嘲笑者ではなく、「理知的人間（die Verständigen）」と「実際的人間（die praktishen Menschen）」である。彼らこそが宗教に敵対する反対者である。[9]

シュライエルマッハーは「理解する（verstehen）」ということを問題にする。これは悟性によって理解し、判断しようとする立場である。[10] これは数え上げ、定義づけ、現象を因果系列の中に位置づける。このようなやり方は、彼に言わせると、本来それ自体一つとなっているものを切り刻み、解剖しようとするものである。そのような中で、宗教的なあらわれを示すもの、独自な本性を有し、最高度に完成されたものは締め出されてしまう。それはとくに自然と芸術である。そればかりではなく、そこでは学問も、芸術も愛も精神もなくなってしまう。なぜなら、彼らは世界を見る基となるものをすべて欠いてしまっているからである。[11]

彼らは教養人であると自負し、民衆を教化しようとするが、しかし、シュライエルマッハーに言わせると、彼らは

真の教養人ではない。彼らには人間を教化する土台が欠けている。それは彼らが宗教を欠いているからである。[12] 確かに、彼らは彼らなりに理想を持ち、彼らの考える道徳観念に従って人間を教化し、改善しようとしている。ところが、人間は彼らの考える理想には合致しないのだ。そもそも、彼らは市民生活の枠の中に押し込めようとしてあまりにも道徳的すぎるのだ、と言う。ここには、シュライエルマッハーの友人、フリードリッヒ・シュレーゲルとドロテア・ファイト夫人の関係をスキャンダラスな出来事としてセンセーショナルに非難していた、当時の保守的・伝統的な教養人に対する批判も込められているであろう。

またシュライエルマッハーによれば、実践哲学にせよ思弁哲学にせよ、人間的な知は宗教を欠くときには人間を教化するものには成り得ない。宗教を欠く実践は、たった一つの理想しか知らず、結局、因習的な、凡庸なものにとどまるのだ、と言う。それは、人間を宇宙と対立させてしまい、人間を宇宙の一部分をなす神聖なものとして受け取らないからなのだ。そこでは、多様性と個性を象徴とする生きた現実を受け止めることができないで、結局、一般概念に堕してしまうのだ、という。また、思弁哲学も宗教を欠くときには、現実を把握できず、こわばりやせこけた骸骨のようなものしか提示できない。結局、無限なものを直観しようという願いを欠くとき、人はものを判断する基準を持たないのだ、と言う。[13]

シュライエルマッハーは人間の知性のみによって、もしくは、人間を社会の道徳的枠内に閉じこめることによっては真の人間形成は不可能である、ということを強調する。そもそも、人間は社会を越え、国家を越え、人間の知性を突き抜けた宇宙との関係の中で形成されていくものだからである。そのためには、宇宙の働きを受け止める宗教が不可欠であった。

二　宗教と人間形成（教養）

それでは人間はどのようにして宗教とふれ合うことができるのであろうか。宗教は人間にとってどのような意味を持つのであろうか。また、教養すなわち人間形成において宗教はどのような役割を果たすのであろうか。

シュライエルマッハーは、まず一方では、人間は生まれながらにして「宗教的な素質」(die religiöse Anlage) を有している、と語る。[14] したがって、それは人間それぞれの有機的組織の内部、あるいは、魂の内部から生じてくる。[15] これは、本来人間の感性（Sinn）が妨げられなければ、自ずと、自発的に生じると言う。

「宗教は、人それぞれのすぐれた魂の内部から必然的に、おのずと湧き出てくる」。[16]

「人間は、生まれながらにしてさまざまな資質をそなえているが、その中には宗教的資質もある。そこで、人間の感性が無理やり抑えつけられることがなく、どんなものにもせよ、宇宙との結びつきが遮られ、妨げられさえしなければ宗教はどんな人においても、独自なあり方で展開したにちがいない」。[17]

「人間のまことの生命の一部をなしているもの、およびその中でいきいきと活動すべき衝動、これらはすべて、人間の有機的組織の内部から生じてくるのでなければならない。宗教はそういう種類のものなのだ。宗教はその住み家である人間の心の中で、休みなくいきいきと動き、いっさいを自らの対象とし、いかなる思想と行動も、その天国的なファンタジーの主題にしてしまう」。[18]

上記のように、宗教は人間の本性の中に根拠を持ち、その有機的組織の内部から生じるものである、と言われる。しかし彼はまた他方、宗教は超自然的なものの啓示、人間を超えた超自然的な宇宙の啓示であるとも語る。

「この世ならぬ力によってはらまれた一つの原子が、彼らの心の中に降りかかり、そこですべてを同化し、しだいにふくれ上がり、やがて大気の抵抗をほとんど受けない世界の中で、あたかも神的な運命のために、とでもいうように、砕けて飛び散る。……きみたちは神聖な魂が宇宙に触発されて生ずるこういう天上の火花を探し求めなければならない。この火花の打ち出される捉えがたい瞬間を待ち受けていなければならない[19]」。

また、『宗教論』の中の有名な表現では次のように言われる。

「その瞬間は、目をさました花々に朝露が吹きかける息のようにはかなく、透明であり、乙女の口づけのように恥じらいを帯びてやさしく、花嫁の抱擁のように浄らかにゆたかである。いや、それらのようにではなく、現にそれらのものそのものとしてあるのだ。現象、出来事は、たちまち、魔術のように姿を変えて、宇宙の像となる。それがいとしい、いつも探し求めている姿に形づくられると、わたしの魂はそこに向かって逃げこんでゆく。私は、それを影としてではなく、聖なる存在そのものとして抱きしめる。わたしは無限世界の胸にもたれかかる。その瞬間、わたしは世界の魂だ。世界のあらゆる力、無限の生命を自分自身のもののように感じているからだ。その瞬間、わたしは世界のからだだ。わたしは世界の筋肉と四肢の中に、わたし自身のそれのように滲みとおってゆき、世界の中枢神経は自分のもののように、わたしの心とわたしの予感にしたがって動く[20]」。

これらの記述が示しているのは、宇宙万物との邂逅の出来事である。宇宙がいわば人間の魂に働きかけてそこに接触、抱合が起こる。そこでは、人間と宇宙、世界が一体として感じられ、無限者の生命をみずからのものとしている感覚に捉えられる。こうした宗教的な体験の出来事をシュライエルマッハーは「宇宙の直観と感情」と名づける。

シュライエルマッハーは宗教との出合い、宗教をもつことについて、一方では、人間生来の素質が開花するのだと

語ることもできたし、また他方、超自然的な出来事とも表現し得た。これは宇宙と人間は本質的な関係を有しているからである。そもそも、人間の自我と宇宙とは本質的なつながり、あるいは、呼応関係を有しているからである。[21] あるいはまた、人間を含めすべての個体は宇宙によって生み出されたものだと言われる。[22] すべての個体、すなわち、有限なものは、無限者である宇宙によって生み出されたものであり、したがって、有限者は無限者の一部であり、有限者の中に無限者を見ることができる、とされる。

ただ、シュライエルマッハーにとって人間の自我と宇宙、あるいは、神との関係は単なる静的関係ではない。そこに動的交流、相互交感とでも言うべきものが存在する。

彼によると、神の創造になるものはすべて二つの対立し合う力によって造られている。[23] これは人間の自我の場合も同様である。一つは自我の中に吸い込む力、すなわち、人間の心を取り巻いているいっさいのものを引き寄せ、みずからの生命の中にからめ取り、みずからの最も内的な本質の中に吸収しつくそうとする傾向である。もう一つのものは、みずからの内的自我を内から外へと拡大していき、万物にそれを滲透させ、伝播させていく力である。前者はものを享受する方向に向かい、自分の方に引きつけられた一つ一つのものを獲得することを目標とする。後者は享受するということは軽視し、常に成長し、高まっていく活動を目ざす。この自我は最終的には宇宙に向かって展開していく。

この両者が人間を形成する力、衝動として働いている。しかし、それらは本来、宇宙によって生み出されたものであり、その宇宙との関連によってのみ真の形成がなされうる。そしてまた、無限者である宇宙との出合いによって、すなわち、宗教を持つことによってはじめて、人間の内で働くさまざまな力、活動が調和しつつ人間形成がなされる

のだ、と言う。

「人間が宗教を持たないまま、個々の方向に身を任せたりすれば、調和は失われ、ふたたび取り返すことができない。人間が身につけた熟練は、いわば単なる彼の生命のメロディーで、それに宗教を伴奏させなければ、いつまでも個々の音のつらなりにすぎない。宗教はこの音のつらなりに対して、必ずしもそれと階和しなくはない響きを、限りなくゆたかな変化をつけながら伴奏させ、こうして単純な人生の歌を、和音ゆたかな、はなやかなハーモニーに変えてやるのである」[24]。

しかし、シュライエルマッハーにとっての真の調和は、それぞれの個別性、独自性を無視し、対立を捨象することではない[25]。そうではなくて、独自性、個別性を保持したままで融和へともたらすことが課題である。これは個人の内部においてばかりではなく、他者、他の個物との関係においてもそうである。こうした独自なもの、個性的なもの、異質なもの、対立するものを並立させ、融和させ、調和をもたらすのが宇宙である。彼にとっては、宇宙は無限であるからこそそれが可能であったし、また、そうした独自なもの、対立するもの、多様なものが並立するのが世界の現実でもあった。そして、そうした宇宙の働きを感性、直観によって受け止めること、あるいは、その宇宙の働きかけに対して自己を開いていくことが宗教であった。

「無限なものの中では、すべて有限なものもなんら妨害をうけずに並び立ち、すべてが一であり、真実である」[26]。

「すべて存在しているものは、宗教にとっては、必然なのだ。すべて存在しうるものは、宗教にとっては、真実な、それなしではすまされない無限なるものの象徴なのだ。この点を見いだしさえすれば、そこから無限なるものに対する彼の関係も発見されよう。たとえ、それ以外の関係からすればどんなに排斥すべきものでも、またそ

れ自体いかにくだらぬものであっても、この点を顧みるなら、それは存在する価値があるし、保存され、観察されるに値するのだ。敬虔な心情の人からすれば、神聖ならざるもの、卑俗なものに至るまで、あらゆるものを神聖な、価値あるものにするのが宗教である[27]」。

このようにして、無限なるものである宇宙のみが、すべてのものを包括しうるのである。それゆえ、この宇宙の働きを受け止める宗教は「調停人」、「仲裁者」として機能しうるのである。したがって、「宗教だけが人間に普遍性を与える[28]」とされる。

また、シュライエルマッハーはみずからの宗教との出会い、および、宗教がみずからをどのように形成したかということについても次のように語る。

「宗教は私の若き生命を養い、まだ閉ざされていた世界を準備してくれた母胎であった。私はその聖なる胎の暗がりの中で育ってきた。私の精神は、外界のさまざまの対象、つまり、経験と学問を見いだす前に、もうその中に息づいていた。宗教は、私が父祖から受けた信仰を篩にかけ、心を古びた過去のがらくたから浄めはじめようとしたとき、私を助けてくれた。神や不死の観念が、疑いを知った目から消え去ったときも、そばにとどまり、わたしを活動的な生へと導き、自分自身というものは、その徳も欠点もあるがままに、一つの分かちえぬ存在として神聖なのだ、と教えてくれた。ただ、宗教のおかげで、私は愛と友情を学んだのである[29]」。

彼にとっては、まず、宗教は人間の生そのものの内部に深く根ざすものであった。そして、人間が成長し、経験し、学び、自己を形成していく過程の基盤、土台となるものであった。そして、自己と世界、自己と他者を媒介するものとして機能した、ということができる。すなわち、自己を世界と他者に開きつつそれらを受け止め、そしてさらに、

自己を確立することが宗教を通して可能となった、ということであろう。これは換言すれば、自己の存在根拠および自己の神聖さの発見と世界と他者の発見を宗教が提供したことを示している。

三　人間性、個別性、愛

宗教が人間を形成する上で不可欠であり、宗教が人間に調和をもたらす、とシュライエルマッハーは語る。それでは、それはどうしてなのであろうか。具体的にはそれがどうして可能になるのであろうか。そこには「人間性」が深く関係してくると思われる。彼は創世記二章の最初の人アダムとエバの物語を次のように解釈する。

「最初の人間がただ一人、自分と自然だけで暮らしていた間は、確かに神が彼をつかさどっていた。神はさまざまなやり方で語りかけたが、彼にはそれが理解できなかった。神に答えようともしなかった。彼の楽園は美しかったし、美しい天からは星々がきらめきを送ってきた。しかし、世界に対する感性が彼の心には開かれていなかった。心の奥からも、それはあらわれなかった。ところが、彼の心はある世界への憧れに揺り動かされたのである。彼はあるいはそれで世界をつくることができるかもしれぬと思って、神の被造物、動物たちを駆り集めた。このとき神は自分の世界に人間がたった一人しかいないのではなんにもならない、と覚りたもうたのであった。こうして、神は彼の助けをする女を創りたもうた。するとこのとき、はじめて、人間の中に生と精神に充ちたひびきが動き出し、はじめて彼の目は世界に対して開かれた。彼はその肉の肉、骨の骨に人間を発見し、人間の中に世界を見いだした。この瞬間から、彼は神の声に聞き、それに答えることができるようになった[30]」。

ここに、創世記のエデンの園の物語を通して人間が世界に対して開けていく様子が示されている。ここでは、アダムは自分とは異質な存在であるエバに出会う。このエバとの出会いを通して、彼の生命と精神が輝きだし、そして、エバの中に人間を発見し、さらには、その人間を介して世界を見いだし、そして、神との対話も可能になったのだ、という。シュライエルマッハーはこの物語を受けて「世界を直観し、宗教を持つためには人間はまず人間性を見いださなければならない。人間性は愛の中に愛によってのみ見いだされる」と述べる。

シュライエルマッハーはすでに、一七九八年にシュレーゲル兄弟が中心になって発行したロマン派の雑誌『アテネウム』の中に寄稿した「高貴な婦人たちのための理性の問答案（カテキズム）」の中で、「無限なる人間性（die unendliche Menschheit）」という表現を用いている。川島はこれを一八〇〇年に書かれた『ルツィンデに対する親書』との関連で「『人間性』とは、人間に働きかけて、その内面を陶冶し完成へと導く主体である」と解釈している。[31] ただ、この「人間性」が具体的にどのように人間に働きかけて陶冶し、完成へ導くのか、また、その「主体であること」の意味がさらに問われなければならないであろう。

『独白録』（Monologen）の中で、シュライエルマッハーは自分が「人間性の自覚を得、そしてもはやそれを失うことがないであろうと知った」、すなわち、「全き人間性の自覚」の喜びについて語っている。[32]

これはカント的な「理性」の発見であり、それを通しての自由の自覚であった。ここでは、シュライエルマッハーは、各人にはそれぞれ固有の地位や立場が与えられており、その限りにおいて個人は区別されるが、「内的人間性、すなわち、個人は独自に作り上げられた存在ではなく、各人は本来常に同一なのだ」と考えていたと言う。[33] しかし、シュライエルマッハーは、人間性は普遍的な、共通なものであるとする考えには満足できなかった。

こうした中で、シュライエルマッハーは個体の独自性、個別性の意味について目を見開かれる。この個別性の思想の形成において寄与したのは、ライプニッツの哲学とフンボルトであると言われる。[34] ただし、シュライエルマッハーは個別性と多様性を宗教との関連の中で独自に位置づける。

「人間性を独自の仕方で表現すべきだということ、しかも人間性の胎内から生まれる種々のものを残らず時間と空間との充実のうちで実現するために、各人は人間性の要求を独自に混和すべきだということが私にはっきり分かってきた。この考えが殊に私を向上せしめ、私を周囲にいるくだらない人や教養のないものとは別のものにした。この考えによって、私自身を特殊な形態と教養とを享受すべき唯一の望まれた、したがって選ばれた神の作品であると感じる」。[35]

シュライエルマッハーは、個人個人が独自な形態と教養を有する、選ばれた「神の作品」である。したがって、それぞれが人間性を独自に表現すべきものである。したがって、ひとりひとりが「人間性の一つの摘要」であり、その個性の内に「人間の本性」を包括している、と言う。

また他方、個人は無限の人間性のあらわれの一つに過ぎないのであるから、異質な他者を通して全き人間性を直観することが求められる。

「人間は全き人間性を直観し、その人間性のあらゆる他の表現に自分自身および自分の表現と比較しつつ対置することを始終自分自身に求めていさえすれば、自分の自己性の意識を維持していくことができる。それというのも個体はただ対置することによってのみ認識せられるのだからである」。[36]

他者を通して無限の人間性を直観すること、これは自己の独自性・個体性を認識することでもある。このようにし

て、同胞ひとりひとりの存在がなければ人間性を直観することができないということを知ったとき、そうした同胞すべてを区別することなしに内心からの愛と好意をもって抱きしめることこそ自然なことではないか、とシュライエルマッハーは同胞への愛について語る。[37] この愛は、教養すなわち人間形成とも深く関係している。自らを独自に形成するためには、自らにとって異質な教養を受け止める感受性と愛が不可欠である。[38]

この人間性は、歴史の中で展開し、発展していく中で完成されるものである。これは、歴史を未来から、完成の時点から見る視点である。

「人間性は、その存在において見るだけではなく、その生成の相においても見なければならない。人間性もかなり大きな軌道を持っているが、人間性はその軌道をたどってもとの所へ回帰するのでなく、前へと前進してゆく。人間性はまた、内的に変化してゆくことによって、より高きもの、完全なものへと形づくられてゆく」。[39]

これまで見てきたように、宗教を見いだすためには人間性を見いださなければならないと言われたが、しかし、宗教はこの人間性にとどまるものではない。「宗教の最高目的は、人間性の彼岸、人間性を超えたところで宇宙を見つけ出すこと」[40]である。愛も最終的には宇宙との合一へと向かう。この愛は、おそらく、宇宙がそれぞれ個別的なものを生み出し、保持し、そのうちに自らを映し出している、その宇宙の働きとも無縁ではないであろう。

四　むすび

宗教を見いだすためには、まず、人間性を見いださなければならなかった。そしてこの人間性を見いだすことは、

他者を介して自らの独自性を自覚することと不可分であった。このように、自らを独自なものとして形成していくことが教養であった。しかしこれはまた、他者をも固有なものとして認めて対置していくことであった。結局それは、異質なもの、対立するものを融和へ導き、調和・一致をもたらそうとするものであった。実はこれは、一にして真である宇宙の視点から見ていくこと、未来の完成の時点から照射すること、あるいは、宇宙からの啓示として見ていくことに他ならない。

註

(1) 野田宣雄『ドイツ教養市民層の歴史』講談社、一九九七年、二〇頁。

(2) 野田、前掲書、二〇、二一頁。
M. Riemer, Bildung und Christentum. Der Bildungsgedanke Schleiermachers. 1989, S. 10.

(3) 野田、前掲書、一八頁。
宮本直美『教養の歴史社会学』岩波書店、二〇〇六年、五七、五八頁。

(4) 宮本、前掲書、五八頁。

(5) 野田、前掲書、一五三頁。

(6) Ursula Frost, Einigung des geistigen Lebens zur Theorie religiöser und allgemeiner Bildung bei Friedrich Schleiermachers, 1991, S. 224.

(7) F. D. E. Schleiermacher, Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern, 1799,. (以下Rと略記) S. 2f.
高橋英夫訳『宗教論――宗教を軽んずる教養人への講話』、筑摩書房、一九九一年。

(8) R., S. 155.

(9) R., S. 144.

(10) R., S. 148.

(11) R., S. 152.

(12) R., S. 90.

(13) R., S. 53.

(14) R., S. 144.

(15) R., S. 139.

(16) R., S. 37.

(17) R., S. 144.

(18) R., S. 139.

(19) R., S. 30.
(20) R., S. 73-74.
(21) R., S. 111.
(22) R., S. 56.
(23) R., S. 6-7.
(24) R., S. 115.
(25) R., S. 40.
(26) R., S. 64.
(27) R., S. 65-66.
(28) R., S. 122.
(29) R., S. 14-15.
(30) R., S. 88.
(31) 川島堅二『F・シュライアマハーにおける弁証法的思考の形成』、本の風景社、二〇〇五年、九三―九四頁。
(32) F. D. E. Schleiermacher, Monologen, 1800, S. 35. (以下Mと略記)
(33) ibid.
(34) Urusla Frost, Das Bildungsverständnis Schleiermachers und Humboldts im Kontext der Frühromantik. S. 861. (200 Jahre "Über die Religion", Akten des 1. Internationalen Kongresses der Gesellschaft Halle, 14-17. März 1999.)
(35) M, S. 40.
(36) M., S. 50.
(37) R., S. 109.
(38) M., S. 51.
(39) R., S. 99.
(40) R., S. 131.